

## 別記「プロポーザル提案依頼事項」

### 【はじめに：本計画が目指すもの】

本業務は、「50年先も続く砥部町を作る」ための最初の10年間を描く非常に重要な計画の策定となります。単なる行政文書の作成にとどまらず、砥部町の未来の「町をデザインする」という視点を持った計画づくりが求められている。

本業務の受託を希望する事業者は、以下の【若手職員プロジェクトチームからの提言に基づく事項】及び【施政方針等に基づく戦略的提案事項】の両面から、具体的な提案を行うこと。

### 【若手職員プロジェクトチームからの提言に基づく事項】

#### 1 町民が思わず手に取りたくなる、親しみやすい「町をデザインする」計画づくり

現在の計画は見づらいという声を踏まえ、町民が直感的に理解できるデザインや表現を提案すること。イラストを効果的に使ったり、持ち運びやすいコンパクトなサイズ（ハンディサイズ）にしたりするなど、町民が「読んでみよう」と思えるように心理的なハードルを下げる工夫を提案すること。あわせて、これからの砥部町を「デザインする」という観点から、町の魅力が視覚的に伝わる表現手法を提示すること。

#### 2 取組と結果のつながりが、はっきりと分かる目標設定

行政の取組と、その結果としての目標数値のつながり（因果関係）が弱いと思われる項目を見直すこととしている。両者の関係がしっかりと論理的につながり、本当に町民の暮らしを良くするための目標設定ができるよう、専門的な視点からのサポートを提案すること。

#### 3 町民が「自分のこと」として関わり、幸せを実感できる仕組み

アンケートやワークショップで集まった町民のリアルな声が、どのように計画へ反映されたのかを分かりやすく示すこと。また、町民自身が「自分にできること」を書き込める余白を設けるなど、まちづくりを自分の暮らしと結びつけ、思わず行動したくなるような仕掛けを提案すること。さらに、行政の取組によって、町民が実際に「暮らしが良くなった」「幸せだ（ウェルビーイング）」と実感できているかを測れる仕組みを提案すること。

#### 4 対象者や場面に合わせて「未来を語り合う場」を生み出す広報物

完成した計画を単に配るだけでなく、町の集会（タウンミーティング）、学校の授業、企業の研修など、あらゆる場面において「まちの未来について語り合うための道具」として活用できるよう、対象者ごとの広報物のあり方を提案すること。

## 5 予想外の変化にもしなやかに対応できる柔軟な計画

先が読めない時代や社会の大きな変化に対応するため、一度決めた計画に縛られすぎることではなく、その時々状況に合わせてしなやかに見直し、対応していけるような柔軟な計画のあり方を提案すること。

### 【施政方針等に基づく戦略的提案事項】

## 6 「人が集まる町」を実現する「住・学・遊・働」の戦略的施策展開

「50年先も続く砥部町を作る」ためには、定住人口や交流人口を増加させ、「人が集まる町」を作ることが不可欠である。町長の施政方針である「住（誰もが安心して暮らせる基盤）」「学（子どもたちの学びを支える環境）」「遊・働（遊びと文化の創出、働く場の拡大）」のコンセプトに基づき、人を惹きつけ、将来の持続可能な自立した町政運営へとつながるような効果的な施策アプローチを提案すること。

## 7 厳しい課題を「オープンに」共有し、共感を呼ぶプロセス設計

厳しい財政状況や事業の優先順位づけといった、行政にとっての課題についても包み隠さず「オープンに」町民へ説明し、議論する場を設けること。単に意見を聞くだけでなく、町民の理解を深め、当事者意識を持って未来の選択肢を共に考えられるようなファシリテーション手法やコミュニケーション戦略を提案すること。

## 8 計画を推進する庁内体制と職員の意識醸成の支援

計画は策定して終わりではなく、実行されてこそ意味がある。役場職員が本計画の目的を深く理解し、日々の業務において「人が集まる町につながるか」「オープンに説明・議論しているか」という視点を持てるよう、策定過程における職員研修の実施や、庁内推進体制づくりの支援について提案すること。